

氏名	柳下 柚子		
ヨミガナ	ヤナシタ ユズ		
学位の種類	博士（音楽）		
学位記番号	博音第375号		
学位授与年月日	令和5年3月27日		
学位論文等題目	（論文）	クラシカル・サクソフォン吹奏時の口唇圧の分析 —熟達者の特徴および初心者との比較—	
	（演奏）	P. Creston : Sonata for Eb Alto Saxophone and Piano 他	
論文等審査委員			
（主査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科） 古賀 慎治
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科） 山下 薫子
（副査）	東京藝術大学	准教授	（音楽研究科） 三界 秀実
（副査）	東京藝術大学	准教授	（音楽研究科） 吉井 瑞穂
（副査）	東京藝術大学	招聘教授	須川 展也

（論文内容の要旨）

サクソフォーンの望ましいアンブシュアについては、楽器開発から間もない1846年にメソッドが出版されて以降、いくつかの方法が提案されてきた。Mayeur（1867）とKlosé（1877）による初期の重要なメソッドでは、下唇を少し巻いて下顎前歯部を覆い、上顎前歯はマウスピースに直接当てるシングル・リップのアンブシュアが推奨された。その後、Muleの活躍とその教え子らによって多数出版されたメソッドにより、フランス楽派の伝統的なアンブシュアが確立した。特に、Londeix（1964）やHemke（1977）によるメソッドでは詳細な解説が記されており、その手法は次の世代のDelangleら（1997）にも受け継がれた。

アメリカでは、Mayeur（1867）などのメソッドが再版される形でヨーロッパの奏法が伝えられた。その後、Muleと同時期に活躍したTeal（1963）はアンブシュアの形成を生理学的観点から詳細に分析し、指導者に大きな影響を与えた。さらに、Muleの教え子であるRousseau（1973）やHemke（1977）によってフランス楽派のアンブシュアが浸透し、アメリカにおけるクラシカル・サクソフォンは大きな成長を遂げた。

日本では、阪口（1961）や大室（1980）によってフランス楽派のアンブシュアやTealのメソッドが伝えられ、これらを継承した須川（1998）の活躍によってクラシカル・サクソフォンは社会に広く浸透し、多くの学習者が影響を受けた。フランス楽派やTealのメソッドでは、下唇はリードのクッションとしての役割を果たすべきであるという説明が共通しており、日本でも同様の考えが浸透した。

サクソフォン吹奏では、主要なメソッドで解説されてきたアンブシュアの特徴をよく理解した上で、下顎から適切な圧力をかける必要がある。今後は演奏音の音響解析や筋電位測定、表情変化の観察などを実施することで、適切な圧力と豊かな音色のために必要な演奏技術が明らかとなる可能性がある。本論を元に、サクソフォンの演奏技術の科学的解析や指導法の研究が進んでいくことを期待したい。

（総合審査結果の要旨）

本研究は、アルト・サクソフォン初心者が上達するために必要なアンブシュアの状態を、下顎からリードにかかる圧力の推移を電氣的に測定し、熟達者と初心者を比較することによって、口唇圧という側面から望ましいアンブシュアを明らかにしようとするものである。

第1章では、フランス、アメリカ、そしてその両方から影響を受けた日本の奏法を、体系的に比較考察することによって、現在のアンブシュア指導の方向性を明らかにした。第2章では熟達者の口唇圧測定と

考察、第3章では初心者の口唇圧測定と考察がなされた。

ロングトーン吹奏時における口唇圧を測定した結果、熟達者の圧力の変化は、アタック部、コア部、リリース部に分類することが可能であり、対して初心者は明確には分類できなかった。熟達者はコア部の口唇圧を一定に保つことが出来る傾向が明らかとなった。先行研究が極めて少ない中、客観的なデータとして熟達者と初心者の口唇圧の傾向を明らかにできたことは、本研究の大きな成果と言える。

ただしアタック部やコア部の波形の違いが、どう音色と関連しているのか、また望ましい音色のために必要な口唇圧とは、どうあるべきか、という考察はまだなされていない。また初心者のデータは、将来的にはもっと多くのサンプルが集められて、より精度の高い研究がなされるべきである。

学位審査会での演奏審査では、研究テーマに沿って熟考されたプログラムが演奏され、J. D. Michat作曲 Shams Concerto はじめ、課程博士として相応しいものであった。

従来、教師の感覚や経験に頼って指導されてきたサクソフーン演奏の望ましいアンブシュアについて、その一部ではあるものの、統計的データとして明確化され、将来的により質の高い指導法の確立へ向けた、第一歩を記した意義は大きいと考える。ここを切っ掛けとして他の管楽器へ広く応用することも可能であり、本研究成果は課程博士として妥当と認め、合格と判断した。